

小学校英語活動における教員の意識調査

A Survey on teachers' Attitudes toward Foreign Language Activities

チェン 敦子 村上 加代子

キーワード：小学校英語活動、学級担任、指導法、英語指導

1. はじめに

平成23年度4月より小学校英語活動が全面実施された。新学習指導要領では、その目標を「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」と掲げており、その具体的な指導内容は各校に委ねられている。小学校英語活動における音声指導は、「聞く」「話す」といった口頭コミュニケーションだけでなく、中学校から始まる「読む」「書く」の基盤を作る活動であり、音から文字へとつなげる重要なステージを担っている。

一方で、ベネッセが2009年に行った中学校英語に関する調査によると、中学生にとって英語はもっとも好きではない科目の一つにあげられている。また、英語の授業を70%理解できている生徒が40%しかいないことも指摘されており、英語が生徒にとってわかりにくく、人気のない科目である事が改めて明らかにされた。また指導に関する教員の意識では、生徒の英語学習のつまずきの主な原因を「単語（発音・綴り・意味）を覚えるのが苦手」とする答えが68.8%と非常に高い割合を占めている。たしかに英語の初期学習者が新しい単語を覚えることができなければ、その後の文法や読解の理解にも大きく影響する。だが「どうすれば読めるようになるのか」の検討よりは、「どのように指導するか」といった指導法が先行してきた感がある。筆者（チェン）は、公立小学校英語活動の日本人英語指導者（JTE）として日々教室で担当教員や児童と接している。英語活動に対する複雑な思いや葛藤、ジレンマを抱えながら授業を行っている教員は、決して少なくない。教員の抱える悩みは主に、指導している方法や、自分の技量に関する自信のなさに原因がある。筆者らは平成23年と25年に同じアンケート調査を実施し、教員の英語活動に対する意識の変化を調べるとともに、担当者が抱えている不安の所在について検討を試みた。アンケートの一部回収が遅れていることもあり、現段階では研究ノートとして以下にその要旨をまとめる。

2. アンケート調査の概要

目的

小学校の担任教員の英語活動指導に対する現状を把握すると同時に2年間でどのように教員の意識が変化したかを明らかにする

実施時期

第1回目平成25年7月

第2回目平成25年7月

対象者

兵庫県神戸市の公立小学校学級担任

調査校数／人数

3校47名（A 小学校21名、B 小学校14名、C 小学校12名）

調査方法

各校の校長宛に調査用紙を送付、校長または教頭から各教員に配布・回収を行った。

各校の特徴

A 小学校ではかなり以前から英語活動に取り組んできた。1年生～4年生は月1回、5、6年生は月3回～4回の英語の授業を、平成23年度の英語の必修化の前倒しでその1年前から行ってきた。しかし1年生～2年生の授業は、地域の英語の堪能な人材、3年生～4年生は地域の英語の堪能な人材及び外国人指導助手（地区の公立中学校と兼任）5年生～6年生の授業は、外国人指導助手が行ってきており、平成23年度の時点では学級担任が主体になって行う授業として取り組み始めた。外国人の親を持つ生徒や、海外滞在の経験がある帰国子女も少なくない。

B 小学校及びC 小学校は、2校が協力して英語活動に取り組んでいる。平成23年度の時点では外国人指導助手に任せていたそれまでの体制に代わり、学級担任が指導できるようにと2校で模擬授業を公開したり、勉強会を開くなど研修に積極的な姿勢が見られた。

調査方法

調査は「学級担任のみで行う授業」について、各質問項目に対し「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4つのうち最も当てはまると思われるものを選択する選択式、個々の具体的な意見を自由に述べる無記名記述式で行った。自由記述の回答部分は不要であれば空欄も可とした。

3. 結果と考察

3.1 第1回アンケート調査結果

平成23年度の調査結果では、「先生（担任）は活動計画を毎回立てていたか」という質問に対しては、「そう思う」が67%、「どちらかというと思う」が22%、合わせて89%という結果であった（表1）。これに伴い「活動計画は実行していたか」という質問に対しても「そう思う」56%、「どちらかというと思う」22%とほぼ同様に推移している。「どちらかというと思わない」が22%

であるが、特にコミュニケーション活動の授業では自由な発想も重視する場合が多いので、計画通りいかないことも多々あると理解した。また「活動計画は『英語ノート』の指導資料を参考にしたか」という質問でも「そう思う」が45%、「どちらかというと思う」が33%で、合計8割近くの教員が指導資料を参考に授業を行っていた。一方「『英語ノート』以外の教材やアイデアを取り入れたか」という質問に対しては「そう思う」が12%に留まり、「どちらかといえばそう思う」も22%と低い。「使用言語は英語が主体だったか」という質問に「そう思う」と答えたのは11%に過ぎなかった。「どちらかといえばそう思う」も22%に留まったのに対し、「どちらかといえばそう思わない」が残りの67%全てを占めた。「英語活動の授業に難しさを感じるか」という質問に対しては、45%が「そう思う」、55%が「どちらかといえばそう思う」と回答し、調査対象の学級担任全員が難しさを感じていることがわかった。

表1 「学級担任のみで行う英語活動について」(平成23年) % (人)

	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
先生(担任)は活動計画を毎回立てていましたか?	67 (25)	22 (9)	11 (4)	0 (0)
活動計画は実行できていましたか?	56 (20)	22 (9)	22 (9)	0 (0)
活動計画は「英語ノート」の指導資料を参考にされましたか?	45 (17)	33 (12)	22 (9)	0 (0)
「英語ノート」以外の教材やアイデアを取り入れましたか?	12 (4)	25 (9)	50 (19)	13 (6)
「使用言語」は英語主体でしたか?	11 (4)	22 (8)	67 (26)	0 (0)
英語活動の授業に難しさを感じますか?	45 (17)	55 (21)	0 (0)	0 (0)

(有効回答数=38)

当時の教員との何気ない会話では、英語活動そのものの重要性や必要性を全く感じない、むしろ必要ない、他の活動や教科に力を入れるべきだと考える教員も少なくなかった。次の自由記述調査の中では、教員の率直な気持が述べられている。

表2 記述式調査結果(平成23年)

質問1) 先生が「英語活動」を行うにあたり、不安な点、問題点を具体的にお聞かせ願います。
<ul style="list-style-type: none"> ・発音 (38%) ・ジャパニーズイングリッシュになる ・説明が日本語でしかできない ・英語力そのもの ・英語に対する抵抗大 (64%) ・教材集め、準備等に大変時間がかかるので、他教科の準備と同時に進めていくのは難しい ・必要性が理解できない ・何をやったら良いのか、どうやったら良いのか全くつかめない ・「ゆとり教育」のように結局取りやめになってしまうのではないかと反面残るとなると、教科色が強くなってしまわないか
質問2) 今後、ご自身で知識を深めたい事柄、改善していきたい点を具体的にお聞かせ下さい。
<ul style="list-style-type: none"> ・何の知識が必要なのかがわからない ・より具体的な活動案。だれでも負担なくできるカリキュラム ・教育技術 ・クラスルームイングリッシュを使いこなしたい

<p>質問3) 小学校の英語の授業全面実施にあたり、「担任主導の授業」に関してのご意見をご自由にお聞かせ下さい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・予算をしっかりと取って教材、教具を揃えて欲しい ・負担が大きいばかりである ・担任の英語力の差が児童に大きく影響する ・英語以外の教科における準備に時間がかかり、現状では足りないくらいなのに、さらによくわからない英語に時間をかける余裕はない ・何をしたら良いのかよくわからない。よくわからないから準備や教科研究を始めるととても時間がかかる ・予算配分を増やし、ALTを十分に活用できる現状を作ってからにして欲しい。簡単に上乘せしていく教育課程に対し、とても不安 ・コミュニケーション能力を高める1つかもしいが、英語である必要はない。英語ができるという能力を目指すのであれば、英語科として小学校のカリキュラムに導入すべき。お金をかけずに担任に任せ効果を期待するのはおかしいと思う
--

学級担任主導の英語活動の必修化が全面実施されて一年目、現場の学級担任は「英語ノート」を使用することを基本とし、その指導資料に頼り、それを基に毎回授業計画を立てていたといえる。しかし実際の授業進行や活動内容には難しさを感じており、活動は主に日本語で行っていた。必修化までにある程度の準備期間があったとはいえ、これらの回答からは「学級担任主導の英語活動」を実施するには、まだまだ教員側の自信につながる理解や技術が不十分であったことがうかがえる。実際にこの年に行った教員研修では、活動例の紹介や活動方法についての質問が多く、「何をすれば良いのかわからない」不安が最も大きかった。

3.2 第2回アンケート調査結果

第1回目調査の2年後にあたる平成25年度に行った調査では、いくつかの点で大変興味深い結果が得られた(表3)。まず、「毎回活動計画を立てているか」という質問に対し、2年前には「そう思う」が67%、「どちらかといえばそう思う」を含むと89%が「立てている」と答えていたのに対し、2年後には「そう思う」が0%、「どちらかといえばそう思う」を含んでも38%と大幅に減少した。平成24年度から使用テキストは「英語ノート」から「Hi! Friends」に変更となっているが、指導資料を参考しているかどうかという質問に対し、使用していると答えた割合は変わらず90%近いものの、そうではないと回答した割合が、前回は0%であったところ、12%に増加している。また『「Hi! Friends」以外の教材やアイデアを盛り込むようにしたか』という質問に対しては、2年前には「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせて37%だったのに対し、平成25年度では78%に増加している。これは、英語活動の意義、活動方法、活動のアイデアなどについての知識が深まることで、もともと教員が持っている指導力や授業力を英語活動にも生かし始めた兆しのようにも思われる。

特に大きな変化として、授業中の使用言語についての変化があげられる。「使用言語は主に英語だったか」という質問に対し、2年前は67%が否定的で、日本語の使用が目立っていた。しかし平成25年度調査では、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせると76%もの教員が英語での授業に積極的に取り組んでいることがわかった。『「英語活動」に難しさを感じるか』という質問に対しては、ほぼ変わらず、肯定的回答が100%を占めているが、「そう思う」が2年前の45%に対し、

表3 学級担任のみで行う英語活動について（平成25年）

％（人）

	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
先生（担任）は活動計画を毎回立てていましたか？	0（0）	38（16）	49（21）	13（6）
活動計画は実行できていましたか	0（0）	38（16）	38（16）	24（11）
活動計画はHi Friendsの指導資料を参考にされましたか？	38（16）	50（22）	0（0）	12（5）
Hi Friends 以外の教材やアイデアを取り入れましたか？	22（9）	56（25）	22（9）	0（0）
「使用言語」は英語主体でしたか？	38（16）	38（16）	24（11）	0（0）
英語活動の授業に難しさを感じますか？	64（28）	36（15）	0（0）	0（0）
先生は英語活動を指導することに自信がありますか？（小学校英語教育学会質問項目）	0（0）	12（5）	38（16）	50（22）

（有効回答数=43）

表4 記述式調査（平成25年）

質問1）先生が「英語活動」を行うにあたり、不安な点、問題点を具体的にお聞かせ願います。
<ul style="list-style-type: none"> ・英語力がない（多数） ・発音に自信がない ・臨機応変に英語が使えない
質問2）今後、ご自身で知識を深めたい事柄、改善していきたい点を具体的にお聞かせ下さい。
<ul style="list-style-type: none"> ・自信を持って英語が使えるようにしたい ・英語らしい発音 ・活動案を増やしたい ・具体的、実践的な研修をもっと増やしたい

今年は64％に増加している。

マニュアルに準じて英語で指導することに真面目に取り組み、実際に授業内での英語使用量が増えているにも関わらず、負担が減らず、逆により多くの教員が難しさを感じているのはなぜだろうか。英語活動に対する理解、知識が深まり、授業の進め方や活動方法も把握できるようになれば、自ずと負担が減るのではなかったのだろうか。しかし現実には決してそうではない。平成25年度調査に新たに付け加えた項目の「あなたは英語活動を指導することに自信がありますか」という質問に対して、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」を合わせると、88％の教員が自信のなさを訴えていることがわかる。

4. 今後の課題

小学校の英語活動が担任教員の主導となって3年。2回目のアンケート調査からは、教員が真摯に活動に取り組んでいる姿と同時に、活動そのものへの意義を感じられず葛藤している姿も見られた。記述式回答からは、時間がなく準備が不十分であるという意識、何をすれば良いのかわからず、また自分の英語力にも不安があるといった、指導を支える条件的な側面の不足への不満が感じられる。

また、最も大きく変化した「使用言語」について、英語で授業を行っている教員が増えたことは

小学校英語活動における教員の意識調査

興味深い。自由記述からは、「英語力、発音に自信がない」、「ジャパニーズイングリッシュになってしまう」「クラスルームイングリッシュを使いこなしたい」といった、教員自身の英語力向上を望む声が多かった。「授業で英語を使いたい」と思っているにもかかわらず、自分の英語力に自信がないため、結果的に「活動は難しい」と感じる側面も大きいのではないかと推測される。小学校英語活動において「コミュニケーション中心の活動」が求められる限り、音声活動は避けては通れない。しかしそれを指導する側に全く自信がなければどうであろうか。他の記述回答で見られた ALT の補助を望む声も、教員の英語力への不安感の現れと考えられる。今後は、こうした教員の英語力不安をいかに解消していくかが課題であろう。

参考文献

- ベネッセ教育総合研究所（2009）「第1回中学校英語に関する基本調査」
- 文部科学省（2012）「新学習指導要領・生きる力」第4章外国語活動
- 公益財団法人 日本英語検定協会（2012）「小学校の外国語活動及び英語指導等に関する現状調査」